

本日入浴、五回。便通二回。  
朝鮮速記を閲す。

二十六日 土曜

晴天なれども風少しく立ちぬ。  
鷺尾君より手紙、局務の大體と朝鮮より招聘のことを報じ来る。  
濱田君より手紙、局務の詳細を報じ来る。  
鶏助より手紙、學校衛生講習のこと。  
花房先生へハガキ。  
布川君へハガキ。  
濱田君へハガキ。  
夜、瀬戸醉狂方にて土産物を購ふ。明日醉狂は小田原に行き結婚するとのことを聞く。  
本日入浴、五回。便通二行。

本日讀書、金槐集。

二十七日 日曜

晴、時々雲徂徠す。  
朝おつると共に見付下まで買物に行き、養生園にて杜鵑花を見る。  
留守宅より手紙、中村とみ、はる同封無事。  
おみよさん憲吉君より手紙。  
愛媛縣共進會より案内状を受く、直に返事す。  
花房先生へハガキ。  
花房先生よりハガキ。  
蜂須賀今井兩君よりハガキ官報掲載材料到着とのこと。  
夜は行李を收むるに忙はし。  
本日入浴六回。便通二行。  
本日讀書、唐詩選。

二十八日 月曜

今日は歸途に就くこととして朝疾く起きて行李を收む。

諸拂を爲すに例に依りて甚だ廉なり。茶代番頭女中に心づけなどし、特におしんには心附を與ふ。

九時過ぐる頃發す。主人主婦始め一同見送りす。

幸に前日より申込ありたるによりて門川よりの切符も得られ十時十三分輕便鐵道に乘車す、満員にて窮屈なりしも好晴のこととして朗かに行く。

何の故障もなく小田原に着く、直に電車にて國府津に向ふ。

一時四十分國府津發の豫定なりしも案外に早く着したれば一時發にて東京に向ふ。横濱を過ぐるとき此日一時頃發したる大火の烟を望む。

三時五分東京驛着、小時にして阿部、小柳、今井君等來り迎ひられ、神波、鈴木氏も來る。

又彌の車に行違ひありたれども是も發見し荷物を積ましむ。

歸宅すれば中村かみさん能く整理し置きくれて大に満足せり。留守中に來れる小婢たけも忠めくしく働さぬ。

二、北越紀行 (大正九年)

一月五日 月曜

妻は行李を收むるに努め、予は舊臘より持ち越せる公務を處理す。

午後先づ濱田君を訪ひ職業類別内容撰擇の卑稿其他を託し、局に出頭して統計圖表を撰び持ち歸り、且年玉品を明日分配せんことを山崎使部に頼む。

日本橋に行き山形屋にて乾海苔を購ひ神田驛より代々木驛へ歸宅す。

阿部君來訪行李を收むることを手傳くれらる。

此日さく來りたけの解雇を求めたる由。

赤沼八重子刀自來訪折柄出發前匆々の際とて碌々話もなく歸らる。

石原修君より嚴父君長逝の訃あり歳晚妹君死去の訃あり。未だ弔詞を出すに至らざる。

りしが今又此訃に接す同君の不幸誠に氣の毒千萬なり、直に弔詞を認め香典を封入して送るべきことを言遣す。

午後五時半阿部君と共に家を發す新町までの道にて小柳良七君の訪はるゝに遇ふ。相携へて新宿停車場に行く茲に、今井君の待つあり、三君に送られて池袋を経て赤羽に行き茲に小時待ち北越行の急行に搭乘す。

前日求め置ける寢臺に樂々と平臥し得何時しかに夢を結びて時の過ぐるを知らず、高崎と碓氷とにて目覺めたるのみ。

#### 六日 火曜

長岡にて離床す、急ぎ服を改め行李を整ふ。

七時二十分加茂着鶏助、いね、保彦、志田氏、姉上、服部氏、小柳氏、助川氏等迎ひくれらる。予のみ人力にて舊廬に入る母上の待たるゝあり、温情掬すべし、志田氏姉上、又訪はれ服部細君、同令息、小柳老母など相踵で訪はる。預けたる荷物着せず午後に至り漸く受取る。

三條八百枝の妹も來り正臯も來る血族相會す佳快言辭の盡す所にあらず。

服部氏より強て求められ止むを得ず晝餐の饗を受く鶏助と共に行く服部氏及同分家の主人正三氏同席なり種々藏品を見る半枚方士の二枚折最も愛すへし。

食後鶏助と共に慕參す八百枝のていも來る榮藏の悴雪道をふみつけてくれる、此日天氣清朗殆ど春の如く越後には稀なりと言ふ。耕泰寺大門の邊機業の昌盛なる誠に驚くべきものあり。

此夜小柳氏、助川氏、志田氏、服部氏を招きて小宴、三條の妹も列席す、各氏より夫々贈物あり。

夜遅くまで語る。

此日おつる、花房博士、鷺尾事務官へハガキを出す。夢平に眠亦安し。

#### 七日 水曜

朝越後流の雜煮を食す久々に佳味なり。

助川君來訪良寛の小幅を見せらる鶏助亦數幅を取り出して示す。  
關眞二郎君來訪四十年前を語り今を談す。

八百枝康三君も來り語る。

永井君及其他の町有志續々來り訪はる。

午前志田氏を訪ひ特に設備しけれられたる風呂に入り其所藏の無準を見、特徴を擧げ示す。兒女等皆出て來り正平氏も來り一同に名を言はしむ曰く竹二郎、おせつ、泰三、修平、正作、おのぶなり末子は不在、此兒女等の母今や亡し。

午後加茂有志諸氏の主催に係る講話會に臨む服部氏八百枝氏及鶏助同行す、同會場は第一尋常小學校にて市川辰雄、町長丘山堅、分署長星山利八郎、農林學校教諭森耕一、同石附貫平、尋常高等小學校長松原貞助氏等に面す、講話約二時間生死統計の一斑を語る。聽衆約百人なり。

此夜石角樓に於て新年宴會を兼ねたる予の歡迎會あり之に臨む草野龜吉君渡邊貞五郎君あり大に新舊を語る、八百枝も亦列席す。

會後草野君宅まで送りくれられこゝにて圖を示し草野君と家人とに衛生統計の一斑を語る。

十二時過ぐる姉上も歸られ寢に就く。

八日 木曜

曉來雨滂沱。

六時起床、行李を收む。

七時十分鶏助に送られて新潟に行く、車中鶏助の友人なる渡邊透甫氏と語る。

八時半新潟縣着縣屬中村藤作君酒井君と共に迎ひくれられ同君に伴はれて直に會場に行く。

會場は物産陳列館の樓上なり。

高橋内務部長十時頃來場。

開會式、内務部長の挨拶あり予も亦一言すこれにて畢り予は陳列館を見る。

おつる、花房博士、濱田君、阿部君、小柳君、今井君へハガキを出す。

午後一時開會三時まで一般統計を講ず。

講後車を飛ばして旅館に入る旅館は東堀前通六番町七室長旅館なり誠に閑静にして清潔に下婢亦卑しからず甚だ居心地よし。

東京新聞によりて芳川伯の危篤なるを知る。

夜酒井君來訪今後の日程を定む。

十時寢に就く。

九日 金曜

曇りたれども雨降らず。

徒歩し古町通りを行き繪ハガキを購ふ。

午前九時半開講、一般統計なり。

あつる、花房博士へハガキを出す。

小憩の時鷄助と牛塚氏とにハガキを出す。

午後講習生たる加茂町助役藤崎靜太郎氏訪はる。

後藤事務官、鷺尾統計官に美人ハガキを出す。

午後三時講を了る。

古町通りを散歩して歸宿す。

夜書後れたる此日誌を認め三共矢野氏に原稿取集め方のはがきを出す。

蜂須賀君にはがき年始状の増刷方を頼み遣る。

十日 土曜

朝來一片の雲なく日本晴にして氣温亦高く頗る佳快なりしが夜に入り雨となる。

午前二時半一般統計を講ず。

あつると花房博士とに手紙を出す。

午後二時間講演一般統計論を了る。

物産陳列館を見て購ふべきものを見定む。

新潟縣衛生會より講演の交渉あり不愉快なりしも十四日午前二時より婦人健康問題及乳兒死亡に就て講演することを諾す。

歸途古町通り西堀通り散歩。  
晚餐後ピスケットと蜜柑とを取寄せ食す。  
治療薬報の原稿閲覽。

十一日 日曜

朝來雨屢來る。  
車を倩ふて出づ。

午前二時間半人口統計を講ず。

陳列館にて北越太平記及繪はがきを購ふ。

歸宿後新潟毎日新聞社員江都香園君來訪此人下條の生れにて鷄助等友人なる由人口疎密の問題を話す。

長郷友泰君來訪目下越後鐵道取締役なる由舊を談して轉た追懷に耐えず同君より頻りに外出して晚餐を共にせんことを促されたれども辭して旅宿の晚餐を供し且つ談す酒井幾藏君來訪梨子を贈らる。

花房先生とおつるとに手紙を出す。

長郷君と共に花房、鷺尾、後藤、田中君等にはがきを出す。

十二日 月曜

終日曇、夜に入り雨と爲る。

午前午後共に國勢調査論を講ず。

會場にて新潟朝日新聞主筆上野喜平次氏に面す中蒲原郡大江山村農業技手星山貢君と語る。

歸宿後越佐新報記者小林登與治氏來訪。

午後五時より新潟師範學校教諭本間貞藏氏の案内にて師範學校に臨み同校生徒の爲めに青年の死亡に關する統計の結果及國勢調査を談す。

午後七時より新潟實業補習學校に臨み生徒等に國勢調査の宣傳を爲すこは訓導長谷川三平氏の乞を容れたるなり。  
九時半歸宿再び入浴して寝ぬ。

此日おつる、花房先生、神波君、富所清吉にハガキを出す、神波君へは芳川伯告別式のことを頼みやり清吉へは此度は訪はざる旨を告げやりたるなり。

十三日 火曜

昨日の疲れにて寝過しぬ。

朝尙雨歇まざりしが午前より日照り夕刻又曇り夜に入りて風雨烈し午前午後國勢調査を論ず。

花房先生へハガキ、鷺尾君へハガキ。

星山君より種々の質問あり。

歸宿後星山君又來訪、土地利用の統計を論じ職業統計の必要を説く。

長郷君より手紙竹塗の盆並に印刷物を贈らる。

今井久則君よりはがき。

夜酒井君來訪縣よりの贈與金を携へらる且曰く宿の拂は縣に於て仕拂ふべしと。

十四日 水曜

雨時々來り氣溫低し。

午前十一時までに講演を終了す。

大達理事官に面會。

十一時半終了式舉行予も亦一言す。

酒井君と共に陳列館にて講習生寄贈の記念品を撰擇す、藤金六十餘圓なりし由琢齋の香爐、逸溪の盆等四十點に及ぶ。

衛生會理事としての關井常彌君來訪、久濶を叙し相携へて會場師範學校講堂に行く長井千尋君、高橋辰次郎君、八十川榮太郎君等あり多くは婦人なりしが約二時間半講演直に別を告げ室長に引上ぐ。

酒井君先づ記念品等の整理を爲しくれらる、關井君來訪衛生會よりの贈品硯箱を與えらる。

行李成り五時過ぐる頃出發す。

新潟驛まで送りくれられしは中村主事、酒井君、關井君其他なり。

六時新潟發六時五十五分加茂着鶏助時間を誤りて來らず獨り車を俤ふて歸宅。

此日や青海神社お籠りの夜として市中の人々皆參詣す、嘗て幼時耕治郎の裸參りを爲せる滑稽事並に神社炎上の慘事等想起し感慨甚だ多し。

夜飛雪中に志田に行き浴す。

歸來清七婆ありて語る。

十五日 木曜

夜來の雪七八寸積り尙降ること旺んなり。

朝助川婦人來訪梨子一箱贈らる。

八百枝康三君來訪本川鹽引一尾を贈らる。

午時八百枝、鶏助と共に志田に招かれ行く、老人正平君同席、山陽、雲華、和亭等を見る。

午後二時農林學校に行く森氏石附氏及其他の教職員あり、直に講堂に行き統計を講ず。

右講演中柏崎深井氏より電話是非立寄吳云々。

一旦歸宅す柏崎より電報講話會見合せたり停車場にて面會せんと、電話電報何れか正しきやを知らんと欲す而し雪の爲兩者不通其意を果さず仍て電報を正しと爲し柏崎には下車せざることに決す。

夕飯に小柳氏に招かれ鶏助と共に行く、欸待到らざるなく頗る馳走せらる、又藏品を見る其主なるもの半牧の山水屏風一雙、鐵齋人物半雙、鐵齋米點山水幅、半牧半折全紙數幅、就中寒竹、芳齋青綠山水密畫、梅關の雪舟臨摹、抱一の富士越龍、文中の同上、洞春美信三幅對等なり。

歸宅すれば農林學校石附氏あり加茂名産を贈らる此もの現に北米に多く輸出すと云ふ。

十六日 金曜

雪霏々。

小柳氏訪はれ梨子一籠を贈らる。



服部氏訪はれ眞綿チヨツキを贈らる。

志田氏より自然薯を贈らる。

八百枝の正臯來り話す。

花房先生にはがきを出す。

新潟中村君、酒井君へ禮狀を出す。

荷造りを爲す。

鶏助に今後のことを話しいね子にも聞かしむ。

夕飯に山十より西洋料理を贈り來る。

午後六時五十分加茂を發す、停車場まで送りたる人々鶏助、いね子、姉上、小松

氏、助川氏、柳屋の姉さん、隣の亭主其他なり。折柄雪霏々。

柏崎まで臥床に就かず柏崎にて深井君及講習生某々氏等あり語る。

柏崎にて臥床に入る、田口關山邊も無事に夢中に過ぐ。

十七日 土曜

熊谷にて覺む。

曉天能く晴れ朝暎正に昇らんとす。

車中澤田敬義氏の在るあり大に醫事統計を語る。

赤羽より池袋を過ぎ新宿にて下車し、車を傭ふて歸宅す。

正午に近き頃鶏助より歸宅通知の電報到來。

### 三、關西紀行 (大正九年)

三月十二日 金曜 晴

朝出仕、午前中用務を處し、午後柳澤伯を訪ひ過日來の問題なりし宣傳書のこと、  
業分類のこと並に評議會のことを話し歸る。

歸宅後行李を調ふ。今井、阿部兩君來訪。

晚餐後兩君に行李を託し代々木より東京驛に行く。

東京驛にて見送りくられし人々。水科、松田、島、柴田、中村、河野、加藤、神

波、近藤、須田の諸君なり。水科君に柳澤伯の一件を託し後事を託す。八時二十分發車、寢臺に就く。

十三日 土曜 快晴

朝六時十三分名古屋驛着。佐藤新君迎ひられ、偶然鷺尾君に遇ふ快言ふべからず。同君は今明日の休みを利用し一寸郷里に立寄らん意ありて茲に在られたるなりき。佐藤君に水面のことを簡単に話し鷺尾君と共に乗車。

津までの間に鷺尾君に東京にての出來事を語る。

八時五十分津着、中村織之助君迎ひらる。

鷺尾中村兩君と共に物産陳列館一覽、縣廳に行く。

山脇知事に面し來意を告ぐ、知事は今日發上京の筈。

午後中村君と共に鳥羽に向ふ。停車場にて鷺尾君と分袂す。鷺尾君は其郷里白子町に行かるゝなり。

一時半鳥羽着、直に警察署を訪ふ、署長中世古長之助君に面し水面調査の用務を聞

く、聽て志摩郡書記石井武八君亦來る、同君は嘗て衛生事務講習員として予を知れりとのこと意外の邂逅なりき。用務果て、後三君に伴はれて日和山に登り鳥羽港展望。四時二十分鳥羽發山田に着す、市長渡邊新太郎君吏員を派して迎ひしめらる。

油屋支店に投宿。

夜、市役所樓上にて國勢調査講演を爲す。聽衆は市の重立ちたる人々六七十人なり。おつると花房先生とはがきを出す。

十四日 日曜 時々小雨

朝、渡邊市長並に市吏員の訪問を受く旅館に對する調査の方法等に就き縷々協議す。十時中村君と共に參宮。先づ外宮に、それより電車にて内宮に詣す。小雨を降る神寂さ何事のおはしますかいと尊とし。歸途赤福の餅をたべる。

徴古館農業館を見る。古文書にはよきもの無しと思ふ。

二時五十分山田發、津にて中村君と別る。

車中大津京都邊の參宮遊覽客の無作法なるを見て苦々しく思ふ。

八時半を過ぎて京都に着し直に菊岡家に投宿せるも折から東京神田なる女子商業學校生徒の修學旅行者多數在宿し十時漸く室を得て入る。

おつる、花房先生、鷺尾君、水科君、調査課諸君にはがきを出す。

十五日 月曜 朝來雨歇まず。

朝調査課に宛經過報告を認む。神戸北垣君にはがき。

女學校生徒の爲混雜を極む。

朝湯に入りて出かく。

大學に財部君を訪ふ不在。轉して眞如堂畔に同君を訪ふ。陽成院陵の隣りなり。床に拙堂の引痘七絶を掲ぐ新宮涼庭に寄する所なり甚だ面白し。職業分類に就て同君に謀り二十六七日頃再訪を約す。

京都府廳に臨時國勢調査部を訪ふ。井手副部長と今川屬とに面し事務打合を爲し、二十六七日頃再訪を約す。

江塚君の寓を訪ふ。今尾景年の別墅なりとて美宅なり。玄關にて細君と語りて別る

市川君の寓をも訪ふ。是亦細君と小談して別る。

四時十分京都發、神戸に着するや否や波止場に行く北垣君在りて種々幹旋しくられ且つ蜜柑を贈らる時に當りて甚だ美味なり。

宮崎丸に塔乗、船長と船舶調査談を爲し別れ就褥す。

海上荒れ模様なりしも予は熟睡せり。

十六日 火曜 陰晴定めなし

風波甚だ高く船動搖せりとして人々難澁せるもあり、予は殆ど感ぜず佳快に過ぐ。

午前四時半汽笛に驚き覺む忙手衣を換へて上陸す。

旅館辻樓の番頭あり、其家に投宿す。蓋し縣廳より命じて迎ひせしめたるものとす一睡して起床し理鬚す。

午前縣廳に出頭、先づ和田屬と語り、次て岸本部長に面し聽て又大野副部長の來ると語る。香川新報記者に小話を爲し、歸宿。

追ふて來れる大阪朝日記者と語る。

和田喜一君來訪、統計事務に就て大に談示し、夕刻同君に伴はれて栗林公園に到る造り過ぎたるの感なきにあらざれどもさすがに名園の見て飽くこと無し。

夜、花房先生、おつる、柳澤伯、鷺尾君、水科君に繪はがきを出す。

治療藥報原稿約二十五頁を閱了して成章堂に發送す。

昨日神戸を發する時北垣君より岡山岩上君の電報を收受し直にはがきを出し置きしか香川にて同君の手紙を見此夕又同君の手紙に接す。十八日岡山にて講話會を開きたしとのことなり。

十七日 水曜 晴

香川新報及大阪朝日に予の小談掲載せらる。香川新報廣告に稻葉脩敬君死去の訃あり。指を屈すれば二十二年前予は内務技手として稻葉君は警部として此全縣下を巡回したることあり、予の到着せる其日恰も氏の逝去あらんとは寔に意外、人生の常無きを憶ふて悵然たるもの多時なりき。

午前八時三十五分高松發琴平に向ふ。和田君同行。

途中の山河は皆是舊知、飯野山を望みて稻葉君を追懷して止まず、蓋し飯野村は殊に氏と共に力を盡して防疫に従事せる所なればなり。

琴平町に着し町役場を訪ふ。圖らざりき町長は是澤原貞吉氏ならんとは、氏は嘗て本縣警部たりしことありしも後富山縣に轉じ衛生課長となり、予の内務技手たりし際屢交渉せることあり、特に富山に私立衛生會總會ありたる時氏と共に會務の整理を爲したることあるなり。共に稻葉君の逝去を嘆き舊事を語る。

澤原氏に伴はれて大旅館虎屋に行き晝餐の馳走を受け又虎屋の寶庫を見る大雅の七幅對最も健羨すべく其他應舉福五岳、寛齋等の大作あり淇園、星巖、等見るべきもの甚だ多し。役場吏員某氏に案内せられて金刀比羅神社に參詣す。境内甚だ俗惡なり、次て社務所に入りて美術品を見る。應舉の大作に金粉を施せるが如き心なき徒の處置寔に惜むべく、峯岱の楊柳、杜若、蝶等は言ふも更なり、若沖の百花に至りては其保存の難きを思ふ。又欄間の菊の崇高なる。扇子の意匠に富める寔に驚くべきものあり、茲にて禰宜村上太一郎、主典秋岡守貞兩氏と語る。北白河大妃殿下の

古建築等の趣味に富ませらるゝこと、菊の欄間の大覺寺との關係、宥盛僧都と長曾我部元親とのことなど取りくゝに耳を傾くべきもの多かりき。三時十分琴平發五時十分高松着、辻樓に入る。

調査課へ報告。おつる、花房先生、奥田氏、矢野君へはがきを出す。

風邪益す宜しからず早く寢に就く。

將に臥床に入らんとする時和田氏來訪、談益す密に夜は十二時に垂んとす。

十八日 木曜 快晴

午前九時二十分、高松埠頭を發す。和田君送らる。

宇野に至る海上恰も油の上を行くが如し。

宇野より岡山まで兒島灣埋立の狀況を遠見す。

十二時十分岡山着、岩上義一、井上廉一兩君迎ひらる。此日恰も日比内務部長着任して生駒理事官はそれに行ける由にて名刺を託しありたり。直に縣廳に行き事務打合せを爲す存外に能く運びありたるを快とす。

午後四時より縣會議事堂にて講演會開かれ之に臨みて約二時間國勢調査を宣傳す。

聽衆約百五十人なり。中に秋山直三君筒井八百珠君あり久濶を叙す。新任内務部長日比重雅氏にも面す。

講演終りて後生駒理事官に案内せられて後樂園内小亭にて晚餐を喫す岩上、井上二君同席す此園の暮色亦愛すべし、甚しく樹色の自然形を損せざること栗林公園に優れりと思ふ。

八時五十五分岩上、井上兩君に送られて岡山を發す。

十九日 金曜 好晴なり

午前二時廣島驛着、長沼旅館に投宿す。室なくして隘室に入る而も前客の臥床のままなり。心地悪し。

朝堤徳三郎君來訪、相携へて縣廳に出頭。服部内務部長小濱理事官に面し堤、竹本兩君列席事務打合せを爲し、折柄師範學校本年卒業生五六十人廳舎見學に來れるあり服部内務部長之を議事堂に引き訓示する所あり予にも一言せんことを求められ即

ち宣傳を試む。

午後堤君に伴はれ宇品港を見、發動機船に搭じて呉に行く。呉にては港内碇泊船舶の状を視察し、且陸上街衢の大體をも見、夕刻廣島まで汽車にて歸る。

晚餐後廣島市書記中尾義治氏に迎ひられ崇徳教舎なる廣島市主催の講演會に臨む。

天野雨石君、森川脩藏君、廣島市長、市勸業課長曾田米人君、鈴木秀四郎君等に面會予は國勢調査を講ずること二時間半、十時を過ぎて歸宿して寢に就く。

二十日 土曜 快晴なれども霞あり

朝鈴木秀四郎君來訪事情を聞く、次て高村政太郎君來訪久濶を叙す。竹本君來訪伴はれて宿を出て舊城内なる大本營跡を拜觀し、次て天主閣に登りて展望す。大本營の結構は先帝の盛徳を追頌し、天主閣の規模は戰國時代に於ける毛利氏の要意を想はしむ。

電車にて宇品に行き、茲にて堤氏と寺田熊太郎氏及中尾市書記に會し、寺田君と同行發動機船に搭乘して御手洗港に向ふ。航行の途次吉浦、鍋、隱戸、阿賀、長濱

仁方、三ノ瀬、宮盛、大濱の諸港を視察し 午後六時御手洗港に着し松本旅館に投宿す。

御手洗港は大崎下島に屬し南は藝豫水道を距て、越智半島に對し、港浦の前面には岡村島ありて風波を扼するあり、北は大崎の瀬戸に通し頗る天與の形勝に富む。故を以て古來帆船の來宿するもの甚だ多く、近時大崎上島の木の江盛んなりと雖も而も尙此御手洗の盛んなるに若かずと言ふ。

夜御手洗町長進藤小四郎氏來訪(助役某氏同行)國勢調査に就て談示し且つ質問に答ふ此夜電燈消えて又灯らず。

娼婦の横行甚だ醜陋なるも、海上の櫓聲と彼等の歌聲と相和する所一種の感なき能はざりき。

御手洗の旅宿は素より設備に於て甚だ闕けたりと雖も生魚の潑刺たるものありて食膳甚だ饒かなりき。

夜に入りて雨となる。

二十一日 日曜 春季皇靈祭日なり 朝小雨  
朝進藤町長訪はる。

さしも多かりし帆船は今朝殆ど無し、是夜來の東風に競ふて解纜せるに由ると言ふ  
午前八時半汽船相生丸來港、即ち寺田氏に別れ之に搭じて高濱に向ふ。  
甲板上の一室に獨り眺望を縦まにす。

航行の途次菊間港に寄り、十一時高濱に入る。

森恒太郎氏岡田溫氏及司馬宅逸氏迎へらる。諸氏に伴はれて直に松山に赴き温泉郡  
役所に入る。森氏の取扱ひにて此日午後一時より温泉郡町村長及有志の會合あり講  
演を開くべく望まる。予は國勢調査を講ずること約三時間なりき。聽衆約三百名。  
夜梅の屋にて歓迎會あり之に臨む。和田内務部長、中谷理事官、岡田技師、小橋、  
芥川、武智、森、森平、司馬の諸氏なり。  
夜道後鮎屋別荘に投宿、司馬氏送りくられる。

女中に伴はれて道後温泉に浴す。此日や湯月神社の祭禮俗に湯祈禱と稱し雜踏を極

め、温泉場前に藝妓の手踊り等ありたり。

おつる、花房先生、牛塚局長等へ手紙を出す。

二十二日 月曜 快晴

朝司馬君訪はる。相携へて縣廳に出頭、中谷君も加はり舊城天主閣に上る。天正の  
昔川藤左典厩の築造する所武器陳列あり頗る清潔なり。之を廣島城に比して寧ろ優  
るものありといふべく、其眺望絶佳なり。

午後和内務部長の室に於て事務打合せを爲す。此縣の施設は行届きたるもの多し次  
て産業調査會に立寄り岡田、小橋、芥川氏等と話す。

歸宿後、森氏來訪謝儀を送らる強て之を返戻す。小橋、芥川二氏亦來訪共に統計を  
談す。

二十三日 火曜 快晴 溫暖なり

今曉旅宿に近き割烹店に火災ありたり。

朝ハガキ二十枚を認めおつる、花房先生外出張發途次見送りくれたる諸君へ出す。

朝湯に入る稍清潔なり。

中谷理事官、司馬君來訪待ち居られ踵て武智君來り迎ひらる中谷君の斡旋にて明月上人の頌湯八首の巻物を見る。町役場の有する所、氣品頗る高く、良寛禪師に似たるものあり、眞宗僧の筆蹟とは思はれざりき。

中谷、司馬、武智三氏に伴はれて石手寺を見る寺僧亦來りて語る其山門、三重塔、鐘樓、本堂等保護建造物に屬し、境内佛堂中又見るべきものあり。

歸途道後公園を見る舊河野氏の城趾たり。

三氏と共に温泉郡研究所に入る、森氏迎ひて晝餐を共にせらる。伊豫蜜柑の饗あり午後一時より温泉郡研究所員、産業調査會員、縣統計吏員の爲に統計學を講す。和田内務部長中谷理事官亦來聽せらる。午後四時終了、直に道後旅宿に歸りて行李を整ふ。

森君來訪、伊豫絞及伊豫蜜柑を贈らる。

小橋君亦訪はれ、司馬君踵て來らる。

晚餐後道後を發し、高濱に向ふ。森、小橋、司馬三氏送られ中谷君古町まで送らる高濱に來れば松江丸の來航せるあり、森氏と袂を別ちて之に搭乘す。小橋、司馬兩君船まで送りくられ、司馬君に神戸の北垣君へ電報を託す。

松江丸は前日搭乗せる宮崎丸と姉妹船にして七百噸なりといふ一等船客は予のみなり。高濱を解纜すると共に褥中に入る。

二十四日 水曜 曉來曇

船脚意外に早く未だ十時ならざるに神戸港に着す。

手荷物を船場に一時預けと爲し直に縣廳に行く。小雨。

北垣君を訪へば大阪の木村君あり東京の中村君踵て來る成毛内務部長を訪ひ小談、藤田理事官とも談ず。

食堂にて高等官數氏と語る。

成毛部長の需めに依り縣官の議事堂に集まれるに國勢調査の宣傳を爲すこと約一時間。



神戸市庶務課長上谷岩藏氏に迎ひられて神戸市主催講演會に臨む。

會場は湊川小學校講堂にて聽衆六七百人中に外人數名あり、市長缺員中として助役乾長次郎君同土岐愛之助君司會す、予は約三時間國勢調査を講ず。

講後自動車に送られ荷物を受取り諏訪山常盤舎に投宿、直に衣服を改め兵庫なる音羽花壇に行く。市の晚餐會なり縣の藤田君及北垣君亦臨まる。

九時旅宿に歸る。此日高橋利八君に邂逅し湊川小學校より旅宿まで自動車と共にす。又大阪の木村東京の中村二氏は縣議事堂にも湊川小學校にも來聽し、木村氏より明朝是非大阪に立寄らんことを求めらる即ち諾す。

花房先生、財部君、京都の今川君に北垣君のハガキを出す。

二十五日 木曜 雨

朝諏訪山温泉に浴す。

高橋利八君訪はれ小談。

北垣君次て訪はれ、行李を収めて出發す。

電車にて大阪へ梅田にて東雲に荷物を持ち行く室無しと斷はられ已むを得ず荷物のみを託し置き、北垣君と共に尼ヶ崎市に行く。

先づ尼ヶ崎警察署を訪ひ署長不在として次席警部と語る。

晝飯かき飯を食す。

食後山本警部補に伴はれ船にて港内を巡視す、碇泊船舶は十中八九まで運炭船にして調査上不便少しと認む。歸途向ひ風として船脚甚だ遅し。

大阪に着し直に府廳に行く。木村氏を訪ひ内務部長に面し直に議事堂に出づ縣官中遅しとて歸れる者ありしとか、市區の吏員を合せ八九十人なり、予は國勢調査を講ずること二時間半にして止む。

木村北垣兩君に送られて梅田驛前金龍館に投宿す。此旅宿は嘗ておつる共に九州行の途次投宿せることある家なり、左までに粗末ならず。

北垣、木村兩氏と食事を共にす。北垣、木村兩君と花房先生に手紙を出す。

北垣君の求めによりて「待てば北垣今年の秋は國の光りを増す調査。」

二十六日 金曜 快晴

朝汽車にて京都に行く。

直に府廳に出頭今川氏を訪ふ不在。俱樂部にて晝餐を調ふ。今川氏來る。市役所の標語審査に列席せるなりと。其募集標語を見る甚だ佳ならず。今川氏曰く府には郡市長會議警察署長會議等ありて準備出來ず市も他に多忙なることありて遂に一席の講演をも乞ふ能はざるを遺憾とすと。予は大學に行くべく茲を去る。

大學にては先づ神戸博士に面會して意見を問ふ。次に財部博士來られ又其意見を問ふ。財部博士は細事に亘りて其意見を示さる。

夕刻大學を辭し、東山を徜徉し、京阪電車にて歸阪し、粟おこしを購ひ歸宿す。

二十七日 土曜 快晴

朝行李を收め大阪を發し、荷物は新宿まで送り、手廻りは京都驛に一時預けを爲し京都を漫步す。

先づ博物館に入り仔細に觀覽し午後二時之を了す。

館前の茶店にて寫真版三十枚を購ふ。

電車にて南禪寺に行き、其山門及本堂を見、景年描く所の龍を見る。

南禪寺名物の湯豆腐にて食事す。

岡崎邊漫步す、物産陳列館を見る。

美術寫真畫報三月號を求め、江塚君を訪ふ。大に歡待せられ夕飯を馳走になる。江塚氏の寓は景年の別莊なりといふ頗る凝りたる建築にて襖畫の景年の筆は寔に面白し江塚氏の業績を聞き、其一竿風月の趣味をも聞き興甚だ饒かなり。

九時半辭して停車場に向ふ、江塚君送らる。

十時五十五分京都發、直に褥に入る。

十八日 日曜 快晴

濱松にて褥を離る。

富岳の光景眞に畫中に在るが如く、函嶺を超え大磯に至りて尙一點の雲を見ず。

正午東京驛着。おつる、阿部、今井二君おきとさん迎ひらる。品川にて乗換ふへき

を茲に來れりとして料金を倍徴せられ、再び代々木までの料金を拂ふて歸宅す。

#### 四、東北及九州紀行（大正九年）

五月二十四日

早起新宿驛に行き中村君と會し相携へて浦和に向ふ池袋、赤羽間電車來らず心甚だ急ぎぬ。

九時前浦和着直に縣廳に行く。

會議は議事堂の一室に開かる知事の訓示あり部長座長と爲り副部長と宮武氏と説明す。

予も亦其闕を補ふ。

四時頃會議を閉んとす予は殘餘の議案に就て中央廳の採る方針を叙説し五時半頃退席す。

細雨霏々副部長と宮武氏とに送られ浦和發夜に入りて歸宅す。

二十五日

曉起新宿驛に行き又中村君を待合せて宇都宮に向ふ今日は都合よく赤羽に早着し待つこと多時にして青森行に搭乘す。

九時二十分宇都宮着副部長五月女君と共に自働車にて迎ひらる直に縣廳に行き内務部長と打合せ知事に面す。

會議は赤十字社支部樓上に開かる知事の訓示に次で議事に入る副部長五月女君説明す予も亦之を補足す。

午後四時一旦終了、予國勢調査事務の概要を説くこと二時間、六時半歸途に就く。副部長五月女君送らる。

夜十時歸宅、おつる胃を害せりとして病み、タマ人を傷けしとして問題提起しあり。一面行李を收め他面名古屋の講演筆記を閲讀す心甚だ多事なり。

二十六日

四時より起きて名古屋の筆記を閲讀す。

島君より電話昨日出發せざりしとのこと。

七時過ぎ千葉を廻付し來る荷物に乗せて出發す。心奮はず。

四谷にて中村君に遭ひ同乗して東京驛に行く東京驛まで島君今井君亦送り來る今井君に後事を頼みて出發す。

汽車中名古屋の筆記を閲讀し十一時頃漸く終了す、心緩み睡魔襲ひ來る。

天氣晴朗富嶽能く晴れたり。

宮武君に前日の説明の誤謬を訂正しハガキを出す。

木内君にハガキ野洲には迎も立寄り能はざることを通報す。

夜は安らかに睡る。

### 二十七日

今日も亦晴れたり關門間乗換後氣溫の殊に高きを覺ふ。

佐賀にて吉田君停車場に迎ひられ三十日武雄の講演を約す。

五時半長崎に着す副部長上野君津原君と共に自動車にて迎ひられ直に旅館福嶋屋に

入る居心地よし。

新聞記者續々來訪。

長崎水道斷水にて入浴甚だ不自由なり。

夜は快よく眠る。

福岡縣の部長より長電あり講演の依頼なり諾して返事す。

おつる、花房先生、牛塚氏、鷄助にハガキを出す。

### 二十八日

朝、島君到着したる由。

縣廳に行き知事に面し其紹介にて森長日新聞社主事に會ふ明日の講演を諾す。

會議に臨み協議事項に就き一々補足す。

午後小講演を爲す。

夕金鍋烏屋に知事の小宴に列し早歸す。

津原君來訪十二時近くまで語る。

花房先生とおつるにはがきを出す。

福岡の大川君と佐賀の吉田君にもはがきを出す。

二十九日

朝鈴木學務課長來訪、相携へて勝山小學校に行き長崎市の高等小學生六七百名に講演。

港務部に行き津原君に面し同君に案内せられランチにて港内を一巡す。

上陸後満月に案内せられ晝飯。

一日歸宿又鈴木君に案内せられ師範學校に教育總會に臨み講演す、聽衆動搖して不快なり。

又自動車にて案内せられ長崎ホテルに知事の招宴に列す。快談。

宴了りて知事等と共に長日新聞社の講演會に行く會場は圖書館樓上聽衆約千人、専門學校教授某氏先づ演し次て予約一時間演す次で知事は挨拶せられたり。十一時半歸宿。

三十日

朝八時十分長崎發知事、内務部長、理事官、津原君、森主筆、上野君等送らる。

十一時半武雄着吉田君迎ひられ相携へて東京屋に投宿直に入浴す。

食後吉田君と共に蓬萊山に登る小憩の際山下に島君の來るを認む呼び迎ひて東京屋に歸る。

おつる、花房先生、牛塚君、鷄助、後藤君、鷺尾君、森君、水科君、濱田君にハガキを出す。

町長、郡長來訪。

夜公會堂にて講演、農家の人多く五六百人なりき。

此夜始めて蚊帳に入る。

三十一日

午前八時二分武雄を發し佐賀に行く。

縣廳にて知事内務部長に面す。

縣會議事堂に開會、部長の求めにより國勢調査事務一斑を述べて午前を終る。福岡の大川君來訪明日の福岡市の講演を約す。

午後は協議事項に入り予吉田君の説明を幫助す四時半今日の會を閉す。

會後内務部長に招かれ郡市主任と共に精養軒の宴に臨み宴半ばにして予のみ中座し停車場に急ぐ六時半佐賀發七時半武雄東京屋に歸着一浴して寢に就く。

おつると花房先生とにハガキを出す。

### 五、北海道及樺太紀行（大正九年）

七月十二日 土曜

好晴、著し。

朝、原君、電話にて土地のことを謀る。

出仕、宮内省より來局の福岡子爵等を迎ひ統計局務に就て概略を話す。諸君に暇乞し十一時退廳。工藤氏へ電報、直に第一銀行へ赴き三共會社の配當金を受取り歸途

村井銀行に預金し歸宅す。

午後はおつると共に行李を收め五時一浴して築地精養軒に行く、諸氏既に在り。河津、福田、小川、氣賀、藤本、矢作の諸氏並に長官、次長、鷺尾、後藤、森、水科及予なり。食後職業分類審査に就て長官より依囑する所あり、次長予をして其立案の趣旨を説明せしむ。質問簇出す。

九時過ぐる頃予のみ中坐し直に上野停車場に行く。

停車場に送られたる諸君。柴田、加藤、松田泰次郎、鈴木鉦一郎、松田博、神波、中村、河野、堀内、馬場、須田、近藤、小泉、關、矢野、山川、小柳良七、小柳きと阿部及おつるなり。花房先生へハガキ、寢臺を取りたれども熟睡し得ず、獨窓外の月を望む。

十三日 日曜

平邊にて東方白み原の町邊にて夜明く。

朝立川君に邂逅す。

朝食を食堂にて済ませたれども甚だまづし。

北垣君より送り來れる兵庫縣の細則案を閲讀し意見を記して鷺尾君に回付す。一の關邊にて。

盛岡を過ぐる頃、岩手山を望み曾遊を思ふて感慨多し。

一戸福岡邊睡魔に襲はる。

おつるの心盡しによれる鶏卵にて中食す。

三時半青森着。停車場樓上に小憩。おつる、花房先生、鶏助にハガキを出す。

比羅夫丸に塔乗茲にて又立川君に遇ふ。

船中にて神戸北垣君へハガキ。

内務部長會議の速記を閲了し鷺尾君へ送る。

波可なりに荒かりしも左まで苦しからず。九時半函館に着す。後に知る茲にて黒扇を失ひたることを。

函館勝田支店に入り一旦斷はられたれども頼みて泊めて貰ふ。夢圓かならず。

十四日 月曜

好晴なり

五時起床。おつる、花房先生、牛塚局長、阿部、小柳氏へハガキ。鷺尾後藤兩氏へ封書出す。

發車前市街を散歩す。

七時五十分函館發。大沼公園にて駒ヶ岳を望む噴火も亦見ゆ。噴火灣に入り風光一變、雷電山脈の諸峰に残雪を見、後方羊蹄山巍然として立つ。俱知安小澤邊より小樽行の乗客一時に輻湊す。蓋し小樽に祭典あればなり。

六時四十分札幌着。佐々木氏等に迎へられ山形屋に投宿す。明日以後の講習を打合せ、おつるへ手紙、花房先生へハガキ認む。

十五日 火曜

好晴

早朝散歩扇子繪ハガキを購ふ。

食後朝鮮工藤氏へ手紙を出す。  
九時道廳へ出頭、會場を見、内務部長に挨拶。  
開會式に一言す。

午後一時より二時間、統計の歴史を講ず。  
終了後西十一丁目に高岡君を訪ふ當講習會のことは既に後藤君まで返事せりとのこ  
と、職業分類に就ては快諾。  
市外を散歩して歸り此日記を認め始む。  
今日より豆腐食を始む。  
夜、鷺尾、後藤二氏へ封書、花房先生、山川君、相田君へハガキを認む、相田君へ  
は嬢の見舞なり。

十六日 水曜

晴天にして暑し夜に入り殊に凌ぎ難き思ひす。  
朝、講演三時間。

歸途物産陳列場を見る。

午後朝鮮の速記を閲覽す。

夜蚊出で、安眠を得ず。

秋田縣宮澤理事官より手紙。

午後佐々木君來訪せらるアイスクリームを呈す。

おつる、花房先生へハガキ宮澤君へハガキ。

十七日 木曜

晴天、盛夏らしく暑し。

朝、講演三時間。

午後、小林董君に伴はれて大學植物園を見る鬱蒼たる老樹林を爲し自然の風趣寔に  
愛すべし。標本館にも朝鮮ヌクテと同形の狼剝製あり、アイヌの生活に要する諸器  
具等面白し。園内にアイヌ穴居の跡あり。  
道廳の馬車にて圓山の札幌神社に參拜す。境内六萬坪餘。神苑今漸く着手中なり。



社殿は伊勢大廟の古材を用ゐたりといふ結構莊重なり。苑内櫻樹多く花時遊人絡繹すと。今上御手栽の松あり。社務所に宮司禰宜と語る。

轉じて中島遊園地に行き、拓殖館を見る。西島書記案内せらる。拓殖模型面白し。後藤君より手紙。講習會のことなり。中に政岡亨氏の訃報を同封す。人生何ぞ常なきや。

成章堂より校正八頁來る。直に着手。

夜、尾崎内務部長、内館屬來訪。

花房先生へハガキ。後藤君へ手紙。成章堂へ校正。今夜より蚊帳をつり始む。

### 十八日 金曜

朝、講演三時間。有本太郎君に面し郷談を爲す。

水科君義弟濱田氏に面す。

おつるより小包到着。腕時計、雨衣、枕等なり。

當方よりも洋服單衣シャツ股引など小包と爲し返へす。

圖表を整理し明日の準備を爲す。

おつるへ手紙。花房先生へハガキ。夜に入り小雨。

### 十九日 土曜

朝、講演二時間。

次で高岡君の科外講演二時間を聴く。

午後一時より通俗講演會開かる予生死統計並に人口問題を講ずること三時間。聴衆三四百人稍感動せるものありしが如し。

佐々木君來訪、明日定山溪行きを約す。

花房先生へハガキ。

統計局より動態小票取扱規程着す。

國勢調査局より職業分類稿着す。

加藤、柴田兩君へハガキ。

二十日 日曜

朝、佐々木君に伴はれて六時五十分札幌發。白石にて乗換へ定山溪に行く。途中月寒眞駒内を望み牧場なるものを初めて理解す。藤ノ澤、籬舞邊より光景漸く佳に、豊平川の碧潭奇觀を呈す、定山溪にては高山旅館に投ず、其設備甚だ佳ならず、浴槽は石造にて殆ど原始的なり。二時三十分歸途に着きしも汽車に遅れ又高山に歸り數浴して六時五十分の終列車にて歸る。車中昨日の聽衆松江錠五郎君（札幌治療院長）と語る豊平に下車。

此日定山溪にて花房、柳澤、高野、牛塚、鷺尾、後藤、森、水科の諸君にハガキを出す。佐々木君連名なり。

歸宿後再び花房先生とおつるとに手紙を出す。

二十一日 月曜

土用の入りとて仲々に暑し。

朝、講演四時間。一般統計を終り國勢調査に入る。

本日講習證書を見る予の位階を従六位とす。

夜早く蚊帳に入る。

岡田喜久治君（理事官）來訪。

此夕、花房先生、おつる、原、角倉へハガキ。

二十二日 火曜

例に依り晴天にして暑し。

朝二時間講演、小樽高商大西教授の科外講演を聞く。

午後南一條を廻り物産陳列場を見る。豆菓子を購入。

夜佐々木君來訪、雨來る。

此夕、花房先生へハガキ。花房先生よりはがき。

おつるより手紙その返事を出す。

夜散髪す。

二十三日 水曜

晴天にして暑し。青森縣より電報直に返電す。

午前四時間講演。謝儀として金貳百參拾圓を受く。

午後校正二十四頁を見了りて送る。

晚餐に鐵道俱樂部に招かる。主人尾崎氏、岡田氏、佐々木氏等陪賓高岡博士なり九時歸宿す。

花房先生及おつるへハガキ。おつるより小包到着せり洋服、シャツ、カラ、カフス等なり。

### 二十四日 木曜

晴天、出かけに尾崎氏に禮を述べ。

朝、四時間講演、是にて全部を終了せり。

午後一時より講習證書授與式に列す。一言挨拶を述べ。

歸途又物産陳列場に立寄る。

佐々木君、有本君來訪。講習生より亞麻布を贈らる。

行李を收む。樺太廳より電報直に返電す。

おつるより手紙。憲吉君より手紙。

よごれものゝ小包を東京へ送る。

花房先生へはがき、おつるへはがき。

再校八頁來る。爾後の再校を任す旨申送る。

### 二十五日 金曜

晴天にて暑し。

午前九時札幌を發す。發途に臨み尾崎、富田二氏の官舎に敬意を表す。停車場に見送られたる人々富田、佐々木、小林、有本、納谷氏等なり。

岩見線にて乗換室蘭線にて登別に向ふ。嘗て二十六年前經過の地。今や開發總て普ねく眞に隔世の感あり。安平を過ぐる時中山善藏を憶ふ。

登別より溫泉場まで輕便鐵道、不完全極まるも經過沿道の風光又捐て難きものなきにあらず。

登別温泉場にては第一瀧本館に投宿す。頗る巨屋なれども整はざるが如し。殊に浴室に至りては甚だ佳ならず。此夕下痢す。

花房先生、おつる、牛塚、鷺尾、阿部、濱田君等にハガキを出す。

二十六日 土曜

陰晴定かならず。

曉起、所謂地獄を見、更に進みて大沼を見る。地獄の壯觀聞きしに勝り、大沼も亦人をして慄然たらしむるものあり。食後瀧の湯に入る佳快言ふべからず。午前十一時出發、輕便鐵道殆ど鯨づけの如し。

登別停車場にて松井鋒吉にハガキ。

安平を過ぐる時中山善藏へハガキ。

豪雨沛然として來り、岩見線乗換の頃甚だ難澁す。

九時小樽に着し越中屋旅館に投宿す。雨なし。

楣間掲ぐる所後藤男の筆蹟その人に面するが如し曰く心如水と。

越中屋は頗る美宅にして女中等も亦下品ならず。

此夜蚊にせめらる。

二十七日 日曜

今曉三時頃より大雨、朝も歇まず。

在京諸氏へハガキを出す。おつる、花房先生、憲吉、高橋光威、牛塚、鷺尾、後藤森、水科、關、本丸、角倉、小枝指、濱田、加藤、松田泰、島、柴田、杉原、中村、阿部、蜂須賀、堀内、神波、鈴木鉦、馬場、今井、鈴木繁、小橋、紀本、須田、近藤小泉、關義明、田中太郎、布川、松田博等なり。

有本君道廳員を代表して送りくれる。

午後三時雨中乗船。納谷氏同行す。

一等船客は渡瀬博士、土屋技師夫妻、外人二人、山崎氏、田中氏及予なり。渡瀬氏と能く語る。

五時漸く纜を解く。樺太廳に電報す。

港外に出づれば浪稍高し。

晚餐後早く寝に就く。

夜、下痢三行。體疲れ意氣甚だ振はず。

二十八日 月曜

今曉より寒さ加はり、下痢尙止まず。

氣力衰へ、昨日有本君の携へられたる荻田氏、藤原氏等の手紙を見るだに懶し。

朝食僅に喫し、シャツ股引を重ね又臥床に入る。

晝餐は汁のみ啜りて攝らず。

午後一時頃より漸く甲板に出でたれども身體綿の如し。

五時大泊港に入る。立川君菊地君迎ひられ、北海屋ホテルに投宿す。設備稍意に適す。直に裕と裕羽織とを着火鉢に煖を取りて蘇生の思ひを爲す。

おつる、花房先生、鷺尾、後藤、森、水科、濱田君等へ各連續繪ハガキを出す。牛塚氏へも報告す。

二十九日 火曜

晴なれども時々海霧襲來す。裕に裕羽織にて恰適す。

朝統計年鑑樺太廳治一斑にて戸口に關する一二事實を摘出す。

支廳長村中伊助君來訪。同行して小學校に行く。校長川口重吉氏、中學校長太田達人氏に面し直に講演。

聽衆の大部分は高等小學生なり。即ち國勢調査の必要と其效用とを説きて國民協力の要に及ぼす。

樺太廳遞信技師村上慶治君に逢ふ。

晝飯、村中氏村上氏と共にす。

午後菊地長門氏大泊支廳の齋藤省三氏(糸魚川人)に導かれて漁場を見る。鯨メ糟製造。漁獲物の陸揚。鱈の鹽藏等なり。珍らしと思ふ。南下りの豊漁のこと。

午後五時乗車。植民地的劣等動物混乗す。

そのおもかげ

四四六

貝塚より漁場に沿ふ。

中里に露西亞パンやあり。

唐松大澤邊到る所山火事の跡のみ。大澤は家屋總て露西亞式なり。其制往古のアゼ倉に似たり。

七時半豊原着。石坂事務官、地方課高橋屬、立川君、伊賀岩太郎、眞野清助氏等に迎へられ、立川君に伴はれて旅館花屋に入る。是も亦植民地的なるを脱せず。本日は幾分温かなるも尙單衣にては肌寒し。

食事は甚だ佳ならず多くは攝取し得ず困つたものと思ふ。

手廻り諸品を整理して寢に就く十一時を過ぎたり。

三十日 水曜

晴なれども時々濃霧來る。

五時起床、宿の者等仲々起きず。

昨夜來日記を整理す。

納谷君來訪、次で相良内務部長來訪。

立川君來訪、花房先生及濱田君のはがきを齎らさる。

花房先生、おつる、濱田君、阿部君、鷄助、鷲尾、後藤兩君へハガキ。

午後立川君と共に汽車にて小沼に行き廳立種畜場を見る。藤林技手案内しくれらる

黒狐、十字狐、赤狐十三頭あり。二年目には親となり一腹三頭乃至六頭を生む。餌

は肉類鯨等なり。其藤林君に馴れ喜ぶ状殆ど犬に異ならず寔に愛すべし。馬は十數

頭多くは種馬、牛はエヤーシヤ、豚はバークシヤ、鶏は白色レグホン及緬羊なり。

歸來、永井長官、相良部長、石坂課長の官舎を訪ふて名刺を投ず。

高等女學校の會場を見る。

豊原の日没光景落莫としてうらさむしき何とも名狀すべからず。

花屋主人一週日前腦出血にて突然歿したるなりと云ふ。

名ありて實なき首都何れの日にも其面目を保ち得るや。

繪ハガキを購ふ。

そのおもかげ

朝鮮荻田總務局長、青森縣藤原理事官へ手紙。

三十一日 木曜

朝より曇り午後四時過ぎより雨と爲る。

朝食前散歩す。肌寒し。

午前九時より開講式、城間警察部長に面す。

式に當り予も一言す。

十時より講義を始む。

晝飯豚なべ。花房先生へ手紙。

午後又二時間講義。

石坂事務官長官の名刺を携へ來訪、不遇。

鈴木鴻君來訪。

おつるへ當地の狀況細書を認む。

北海道の佐々木、有本兩氏へ手紙。禮狀なり。

夜に入り治療藥報原稿を見る。  
小包着。浴衣及下着類なり。

八月一日 金曜

雨漸く歇みたれども陰鬱にして寒し。

早曉より飛行大會ありとて人往來す。

昨夜より下痢數行夜に入るも尙止まず水瀉す。爲めに夕飯より豆腐食を中止す。

飛行大會の爲め午前十時より開會のことし、朝は治療藥報原稿を見る。

講義午前二時間、午後二時間。

歸來又藥報原稿を見、約三十四頁分を纏め之を成章堂に發送し、校正の期に就てハガキを出す。

朝鮮の筆記を閲さんと欲すれども下痢の爲め氣力喪失して成らず止む。

花房先生、牛塚局長、鷺尾君にハガキを認む。

葦中樺太の國勢調査規定類を讀む。

夢圓かならず歸心矢の如し。

二日 土曜

空能く晴れたり氣温も亦稍上れり。

午前三時間講演。

晝飯を食せず。

午後又二時間講演。

今日も朝來下痢止まず。身體綿の如く氣力甚だ衰ふ。

おつるへ手紙。

花房先生へハガキ。

鷺尾、後藤兩氏に樺太の狀勢を報ず。

朝鮮の速記を心配しつゝ手をつける勇氣なく寢に就く。

三日 日曜

晴天、午後より曇り小雨あり。

朝、石坂事務官來訪。永井長官の傳言あり。樺太の植民政策を論じ國勢調査に及ぼす。

午後三時間講演。相良内務部長來聽。

午後より樺太神社に詣づ。花屋より二十一丁。高さこと二百三十呎。二の鳥居より百三十呎なり。莊重の建築。神苑も稍整ふたり。歸途小雨に遇ふ。

甘味なきビスケットを購ふ。

寫帖生を購ひ一二寫生す。是亦旅中の一樂なり。

二十八日より三十一日に至る東京朝日新聞を借覽す。東都の空甚だなつかし。

おつるより手紙、宮入氏の渡歐の事を報ず。阿部君より手紙、講習會のことなど書けり。寔に空谷跫音の概あり幾度か之を反讀す。

今日當地新聞に緒方正規博士薨去の報あり。朝日新聞を見るに及びて其肺壞疽なりしことを知り、眞に哀悼に堪えず、人生何ぞそれ無常なるや。

本日尙下痢止まず夜に入り又數行ありたり。



四日 月曜

能く晴れて気温稍高し。

朝石坂事務官へ手紙を出し本夕の宴會を謝絶す。

午前三時間、十時より國勢調査に入る。

晝飯を廢し、歸宿せず。

石坂事務官會場に來訪し長官の意を傳へて慰問せらる。

午後又二時間。

女學校構内に谷間の姫百合の能く開けるを見る。

浴場にて池野博士に會ふ。

今日渡瀬博士投宿せられたりと聞く。

宿の裏通りの所謂料理店は總て淫賣屋なるを覺知す。

夜前途の行程を案じ青森縣藤原理事官或は十二日朝ならでは到着し得ざることあらんを報じやる。

花房先生へはがき。

立川君に豊原に於ける通俗講話會を謝絶す。

身體疲勞し事を爲すの氣力なく彼を思ひ是を思ふて夢圓かならず。

五日 火曜

朝能く晴れたりしも間もなく北風吹き來り一天曇り寒氣襲ひ來るに至る。

早朝おつるへのハガキを認め前夜の手紙ハガキを合せ自身郵便局に持參し今日の船に間に合はすべく出す。

歸途ビスケット及落雁を購ふ。

午前三時間講演。

晝飯を食せず、ビスケットを攝る。

午後、永井長官講習場に訪はれ慰問せらる。

午後、又二時間講義。

講義後博物館を見る。動物標本に奇なるものあり。大山猫の獍猛なる。熊に似たる

クツリの寧ろ滑稽にして悪むべき。イラ草の纖維の美事なる皆注意すべきものならん博物館の前にて木片の化石を拾得す。第三期層の最古層に在るべきもの頗る珍品たり。

歸途若林書店に立寄る見るべきものなし。

夜は樺太要覽を閲讀す。

下痢止みたるものゝ如く大に佳快なり。

六日 水曜

稍晴れたれども尙寒し。

今朝下痢又劇し

早起洗濯す。

午前三時間講演。

晝飯を攝らず。立川君よりヘルプを購ひくれられ之を飲用す。永井長官より手紙に丸藥を副へくれらる、六神丸なるが如し即ち之れを亦服用す。

石坂事務官訪問。今日終講後廳を訪ふことを約す。

午後又二時間講演。

廳を訪ひ石坂事務官及立川君と樺太國勢調査に就て協議し動態調査に及ぼして歸る時に六時なり。

夜は疲労して何事も成らず。

花房先生へハガキ、宮入直子さんへハガキ、おつるへハガキ。

七日 木曜

晴れたれども寒さ減ぜず。

今日下痢なし。六神丸效を奏せしかヘルプ驗ありしか。

午前三時間講演。

樺太廳より金貳百五拾圓贈與。

今日も晝飯を食せず。ビスケットを用ふ。

午後二時間にて全部終了。

此日深川視學、池田屬、佐藤屬等來應せり。  
歸宿後鈴木賢三郎君來訪樺太談面白し。  
獨り行李を收む。

夜立川君來訪、クリームビスケットを贈らる。

永井長官より鯨薫製三箱を贈らる。

鈴木賢三郎君又來訪。植物調査書、動物調査書及貝の化石を贈らる。寔に奇品なり  
記念として永く珍藏せん。

八日 金曜

早起行李を整ふ。

立川君來訪、問題を附與す。

八時出場、試験を行ひ午前中に答案の査閲を了る。成績佳良なる者約十人なり。  
午後一時より講習證書授與式。永井長官臨場。口を極めて予を推奨す。予も亦一言  
す。

式了りて寫眞撮影。

講習生の茶話會に招かれ臨み樺太日々新聞社員關茂に面會、茲にも亦感想談を爲し  
近日新聞載せる所の第七師團公表溫土爐獎勵を罵倒す。

歸宿、諸拂を爲し出發す。

停車場には永井長官を始め廳員並に講習生等約百人見送らる。立川君大泊まで同行  
同車、太田樺太中學校長、四十七年前の渡樺者宮崎豊次翁、北日本汽船會社大泊支  
配人山内氏等にて談甚だ面白し、不知不識大泊着。

例により北海屋ホテルに投宿、居心地よし。

三日前北海道方面暴風あり、爲に航海皆齟齬し九日發の釧路丸は十日に延び明日は  
當地滞在のことゝなれり。

青森縣へ電報を發して之を報ず。

花房先生へハガキを認む。

九日 土曜

晴、豊原に比すれば稍気温高く日中は單衣にて可なりしも夕刻より矢張裕を着たり朝、齋藤省三君來訪。樺太談を聞く。

午後より散歩。風強く埃立てり今日は亞庭神社の夕宮とて市中は賑へり。夕刻朝鮮の速記を読む。

おつるへハガキ、鷺尾事務官へハガキ。

散歩中、鈴木賢三郎君來訪せられたりと云ふ。

十日 月曜

朝、風稍高し。

朝、釧路丸入港、十一時出帆なりと聞く。

一時漸く乗船。鈴木賢三郎君、齋藤省三君見送りくられる。納谷君は切符を得られずして三等に乗る。

同室に白金猿町の八尾澤一氏あり。此人も花屋に滞在せりとて其不都合を盛んに鳴らせり。

船長ボーイ等馴染なれば能く遇しくれたり。

宮崎老人亦乗船、稍々談話の末高峰氏と親類なりと聞く。

夕食後早く葦に就く。

夜に入り浪漸く高く船體の動搖著し。

此夕夢は東都に入りおつると語る。

十一日 月曜

船暈を起すの虞あり朝食を攝らず。

波依然として高く船動搖頻りなり。

隣室の漁紳等花合せに夢中なるが如し。

晝飯僅に攝取。

午後二時船小樽に入港、直に上陸。

測らざりき有本屬迎ひられ相携へて越中屋旅館に入る。

有本氏の尾崎内務部長の命を受け道廳より派遣せられたるものといふ。

納谷君は別れて札幌に行く。  
疲労を癒さんが爲め茲に一宿す。  
此夕移室其隣鉛筆を亡ふたるものゝ如し。  
おつると、花房先生とにハガキを出す。

十二日 火曜

午前三時四十五分小樽發。有本君同乗。俱知安まで見送らる。其好意謝するに辭なし。

羊蹄山駒ヶ岳等風景佳なるものあれども何となく活氣に乏しく快からず。  
大沼公園に下車せんとして其混雜に僻易して止む。

四時二十分函館着。勝田支店に投ず。例に依りて不愉快なり。  
朝鮮の速記を閲す。

夜に入り市中散歩。アイヌの首飾りを得。

九時波止場に行き乗船伏木丸一等は予一人なり。

蒸暑さも毛布に包まれて寝ぬ。

十三日 水曜

曇りて風あり。

午前四時半青森港に入る。

上陸。吉崎君の迎を受け相携へて停車場樓上に休憩。

吉崎君より阿部君の手紙。北海道高橋君の手紙並に北海道より鑛泉誌を送れるを届けらる。

阿部君の手紙に藤田氏土地の處分つきたりと聞きて一寸方向に迷ふ。

吉崎君と打合せ六時三十分淺虫に行き東奥館に宿る。

汽車中花房先生とおつるとにハガキを出す。

一浴食事を済ませ直に青森に行き浦町より中學校の會場に入り二三子に會す。  
各郡市長の挨拶を受け藤原理事官の紹介にて開會を宣せられ予も一言す。  
講習員約四百人盛會なれども何が何やら分からず。

午前二時間午後又二時間國勢調査の話をして、二時半浦町より乗車浅虫に歸る。吉崎君より濱田君の細書と成章堂の校正とを受く。濱田君の手紙にて京地事情を詳にし感慨胸に充つ。夜に入り吉崎君大高君溝江君來訪。濱田君、阿部君、花房先生へハガキ。銀製鉛筆に就て小樽越中屋へハガキを出す。

十四日 木曜

雨來りて冷氣大に催す。  
午前八時十二分發。浦町より車。  
午前九時より十二時まで。  
午後は一時より三時まで是にて國勢調査の講演終り。  
一時間質問を受く。  
吉崎君より花房先生のハガキ島君のハガキを交付せられ先生に拜晤せる心地す。

四時より郡書記等の爲め人口靜態の講演を爲し六時十分前後終了。  
車にて浦町までそれから汽車。

阿部君、吉崎君同行。東奥館にて晚餐を共にす。  
花房先生とおつるとにハガキ。

十五日 金曜

朝晴れたれども山脊風吹きて寒し。  
定刻浦町に行き車にて會場に臨む。  
午前三時間午後二時間一般統計の概念を説く。  
青森縣より金八拾圓謝儀、講習生中郡市吏員より弘前塗硯箱を贈らる。  
講習證書授與式。兒玉内務部長來り予も一言す。  
右了りて郡市吏員の爲に人口動態を講ずること二時間。  
六時半浦町より歸宿す。  
歸宿後行李を纏め九時十二分浅虫を發し青森に行く。

阿部君、吉崎君、大高君送迎せらる。  
停車場にて弘前塗二三點を購ふ。吉崎君荷物を斡旋しくれらる。  
十一時三十分寢臺車にて發し直に寢に就く。

十六日 土曜

平泉にて起床す。天氣晴れたれども氣溫低し。  
仙臺に至れる頃一天漸く曇りて遠く展望し得ず甚だ快味を殺がる。  
車中下痢三行身體違和を感じ頭重し。  
朝鮮の速記を読むも意振はずして甚だ徹底せざるの感あり即ち止む。  
午後四時半上野着。神波、堀内、鈴木鉦、松田、須田、今井(久)、稻葉、阿部並に  
おつる迎ふ。荷物は阿部君と彌彌とに任せおつると今井君とを持して歸宅す。  
あい、たけ並にたま迎ふ應ておみよさん來訪。  
直に花房先生に電話して歸京を報ず。  
身體違和。下痢又數行す。

## 第四篇 詞 藻

### 一 和 歌

大正十年五月十七日 神宮にて

汲む水は源同し水ながら御手洗なれば心清くも

同十八日

未廣く家族のむつみ榮ゆるもわが眞心ぞ要めなるらん

同十九日

かねて知る森の彼なたに淡はけれど富士が根見ゆる今朝の嬉しさ

二十日

霧立ちて四方のくさく掩ふとも富士が根ばかり見えもこそすれ

二十一日

濃き浅きいろもとりに紅葉してうつ高くこそ樟は見えけれ

二十二日

草は萌え木々は落葉す木隠れにいと紅のひと本やしほ

二十六日

代々木野は宮居たふとく野路廣く富士のたかねの近くこそ見ゆ

二十七日

代々木野の東に立つ宮はしらゆるかぬ代々を猶しつむなり

御社をかこめる松は雄々しくも神を衛りのますら雄のごと

二十八日

朝日さす御園の森の浅みどり禽の音高く友呼ぶ聞こゆ

六月十一日

今日よりは梅雨期に入るとや御苑生の木々の梢も重くこそ見ゆ

十二日

代々木野は朝霧こめて見えかくれ兵練る人のいさましき哉  
或る日

よし切りの聲聞く毎に思ふ哉里の川邊の幼な遊びを

今年五月十二日高峰博士の帝國學士會院の表彰を受けたまひけるを祝ひまへ

らせむとて御名の四文字をいたゞきて詠める四季の歌

高山の高きに雪の降りおきていや高山と仰がれにける

峰に尾に錦色てる紅葉に稱ふいさをの赤くもあるかな

譲るともいかでかくれん火串さす學びの山に雄鹿射てしを

吉野山わけ入る路の遠ふくに學びの花の濃きを見しかな

信の路は雨のふるらんくろひめや飯つなかけて雲の濃き見ゆ

霧たちて御寺も杉もこめぬれと鐘の音ばかり重くひゞきぬ

愛て飼へる鶯の死にけるを悼みて

人みなの道行く人もたゞずみて聞きにし鶯今はしもなし



心なくも唱へけるなり法華經の功德あれかし我鷲に  
さしかにのさわに巢構ふ木の下に我鷲のおくつきつかむ

## 二 狂 歌

警視廳にて

世の中はそばもたべあへず電話聞くのびてはならぬ用の多さよ  
大學にて人の歌よめと乞はれければ

歌詠めと言はれて顔を赤門やい加賀はせんとためらへにけり

近藤氏にてハガキを出す

金野氏へ

これや此行きて歸らぬ箱根山こんな女が居るか居らぬか

陸氏へ

みちのくの信夫の山の課長様にはなくとも御茶さこしめせ

奥貫氏へ

千疊の座敷にほしき虎の皮朝鮮までは取りに行かれず

高橋へ

キイサンの白きに優る紋附の黒きを君は何と見てまし

眼にものを言はせてかめるほつれ毛をさてなんとしやうなんとしましやう

虎の皮豹の皮さて獺の皮それは百兩これは萬兩

近藤氏新築祝

千兩の御座敷光るめでたさやこんどは藏の立つべかりける

十一月七日招かれたる西々の額高きは福祿壽、竹庵は眼にけんあれと大黒天、

少年生の夷三郎、黙堂の布袋和尚、一樽の壽老人、われは毘沙門

御祝ひに六福人が招かれて辨天山のたぼが酌する

忠孝のいづれ一つがあるならば忠孝にまでなりもしまいに

竹海老や龍

右山左山しんくの海も渡り經て天にや昇る奥山の龍  
辨天の前に口あく御弟子たちいづれめでたき御顔ばせかな  
立ならぶすかた十六羅漢様のりの御倉の説法を聴く  
此坊主何をすくすくすこむそばかうどんかくふや上人  
檢分のまた終らぬに俄雨土地のうるほふしるしなるらん  
大門て山邑と讀む野暮ならば此にう金を羨みやせん  
鼻の上はくさりにけりないたはしや我身一人のからだにあらぬを  
丸鬚のいきな上布が色眼鏡よくく見ればすがめなりけり  
襟つめてブローチ光る令嬢のため息如何に喉やくるしき  
まゆ墨の流れて黒き片面は夕立打てる空やうらめし  
カシミヤの袴の色と裏表ソバカス多き其顔かな

長谷川佐太郎君に送る

山行くは足の世の中事務執るは指の世の中口の世の中

山神に魅されて刈りしあたら髯山の神にやうらまれぬらん

### 三 俳 句

秋鱒や温泉に入る客の肥えぬらん  
さらでたに日脚早きを秋蠶飼ひ  
秋風や温泉町を通る誰と誰れ  
秋時雨爪琴遠きとなりかな  
尊としや温泉の客に賣る秋茄  
秋雨や病みて温泉に入る獨客  
温泉の山や秋も霞のたなびきて  
秋の蚊の聲だになくて過ぎになり  
ついでと小魚忙し秋の川  
磯一日洗ひ遺しぬ秋の海

温泉の宿や秋も蚊帳つる都人  
 秋の草板碑の文字の鮮けき  
 脚重く船にとゞきぬ秋の雲  
 逗留の温泉宿に長く秋のくれ  
 温泉の村や秋の蝴蝶の何を吸ふ  
 温泉の町も夜ぞ更けぬれば秋の聲  
 山の井の嗽ひ齒にしむ秋の霜  
 稲蟲も無かりし秋を出水かな  
 秋の空五重の塔のいや高さ  
 秋の野に何はみ返す牛二疋  
 日さかりは干鰯にむれぬ秋の蠅  
 秋の日の嶽にかくれて海黒き  
 秋の山登らんと思ふ峰幾つ

秋の夜や温泉の町流すこぜの坊  
 諒闇や祭もなくて秋寂し  
 朝寒むの水釣る音す床の内  
 鮎魚得て山村の秋に醪を賞す  
 銀杏散つて境内錦す五百年  
 早稲晩稲幾段の色や稻の波  
 倒し千す稻頼もしき行儀かな

春の月

春の月唐も大和も朧かな  
 春の月垣の彼方に咳きす  
 春の月傾城欄に寄りて灯さず  
 春の月獨り甲板を徘徊す  
 春の月八萬の大都皆眠る

雉子

重ね鳴く雉子の妻や遠遊び  
雉子鳴いて野は千段の廣さかな  
岩を打つて何を尋ぬる雉子の聲  
雉子鳴くや新道遠き一里半  
これ聞けと耳擘くや夜の雉子

木蓮花

律院の白木蓮の尊とかり  
唯一夜木蓮總て開きけり  
極樂の尊者偲ふや木蓮花  
日本の花とも見えす紫木蓮  
校庭や長者か寄附の木蓮花  
木蓮や落花悔しき色かたち

木蓮の西へと道を教へけり  
木蓮の花に明かるき夕間哉  
木蓮の舟を押し行く小魚哉  
唐焼の瓶にや挿さん木蓮花  
右中央公論課題三月四日投

草矛會課題

春菊

後(表)に春菊咲ける尼院かな  
春菊の残る一本春を占む  
春菊の鉢に取られぬ氣樂さよ  
折らで止む春菊の蟲のあひたし  
種と爲る春菊畠に蔓りぬ

そのおもかけ

春浅し

此山や鹿の子またらに春浅し  
鬚傳ふ朝の雫や春浅し  
妹が着る狸の皮や春浅し  
南椽に離騒讀む男春浅し  
花圃の計畫成らず春浅し

菊根分け

菊根分け札つけ代ふる兩三度  
菊根分け蜀紅交る蝦夷錦  
菊根分け蟲の子捕ふ嬉しさよ  
菊根分け泥つき筆の書悪さ  
菊根分け陰曆有たぬ憾み哉  
鳥交る

四七六

うらゝかな空や小屋根に鳥交る  
三味線の稽古途切れぬ鳥交る  
戀すてふ雀寄り來る垣の内  
鳥交る厠の屋根や帳もなく  
戀雀何れ聳殿嫁御寮

霞

東山霞撞き出す鐘の聲  
霞む江や何處船呼ぶ女聲  
測量の旗や霞める長繩手  
叡山や岩倉あたり遠霞  
糝糊として霞む曲浦や欸乃す  
自働車の霞みて残る埃り哉  
江の島や七里か濱の遠霞

第四篇 詞 藻

四七七

霞む日や濱名の橋を汽車の行く  
 立場幾つ霞みて牛の長鳴きす  
 黒船の烟り残して霞みけり  
 品川や洲崎は何處霞引く  
 李咲く八幡様の御廣前  
 李咲く土塀續きの土族町  
 李咲く麓の村や犬の聲  
 浅蜷得て興知る姫の汐干狩  
 掃きやらぬ落花地に満つ暮の春  
 花明消へ柳暗多き春の暮  
 欄に倚る女の影や春の暮  
 我陸奥に花追ひ行かん春の暮  
 若楓

山門はいとゞ朱けなり若楓  
 我庵や盆栽なれと若楓  
 幾曲り辿る女阪や若楓  
 大師道知るべの紅帛や若楓  
 若楓鐘樓半ば蔽ひけり

青鷺

青鷺の畔に窺ふ深田かな  
 青鷺や我田見廻る歩きぶり  
 雲翔ける青鷺や田を低く行く  
 遠ち近ちの田の面蒼鷺五羽六羽  
 水口や青鷺の脛に瀬を分つ

彌生春(夏隣)

江北は酒屋もなくて彌生春

そのおもかげ

友招く使者の遅さよ彌生春

茗を烹て酒に代ふ夜や彌生春

貸船の旗閑却す夏隣

酒一斗誰と酌まばや彌生春

誰樓の一絃琴ぞ彌生春

更衣

袖ふりて行くや娘の更衣

染めをがらを愛で合ふ歌妓や更衣

帯のみは昨日のまゝや更衣

頼もしや生立つ和子が更衣

衣更へて禪師は鶴に化されけり

風光る

富士が根や真白く裾野風光る

ボール打ッ勇士躍如たり風光る

風光る牧場や牛の高啼きす

江亭の酒席新たなり風光る

風光るこゝ加賀様の御庭かな

寄り合ひて

打集ひ蚤の説聞く日永哉

疱瘡の談終りて春暮れぬ

御談義の長き御庭や花盛り

御土産の一室馨る林檎かな

紙袋はみ出す林檎美しくしき

鮫すがの清きを春の下物かな

葷酒ならば入るべかりしを幕の内

歴々のならびて花の御宴哉

蝶打て葬る和子が涙かな  
花散りて張物に模様置きしかな  
張物の糊に落花の點じけり

藤

朽ちかしく棚を命や藤の花  
其昔長者か邸藤の花  
藤咲いて一村集ふ寺の庭  
行きと同じ藤の下にて又休む  
何神か祠を前に藤の花  
汽車で見し懸崖の藤のうつくしき  
裏町や藤に名高き法華寺  
花は影に觸れんとぞ思ふ池の藤  
去年買ひし縁日の藤の花もなく

白藤は藤の男やいさぎよき

汐 干

女房の溺あわれなり汐干舟  
行きほどの勢はなし汐干狩  
汐干狩腹痛男船番す

李

李咲いて木小屋明るき夕間哉  
媚もなく風流もなく李咲く

暮 春

燭を秉て我何を見ん暮の春

壬生念佛

若僧の何をうなづく壬生念佛  
嘆みして苦かる僧都や壬生念佛



かしましや壬生念佛の下向道  
 みぶり真似る下向の孫や壬生念佛  
 門外の飴やかしまし壬生念佛  
 お隣の牡丹餅甘き彼岸かな  
 近江路や菜の花續く三十里  
 朝寝して梅見の連れに遅れけり

壺焼

御料理や壺焼姪む芹慈姑  
 壺焼の苦さを好くや通り者  
 縁日や壺焼の香に低徊す  
 壺焼の雪隠何を悟らしむ  
 姫御前の壺焼召せる勇氣哉  
 右三題

祝 萩原氏之銀婚

嘗結善縁 琴瑟比絃 廿有五年 唱和于遷  
 蠡羽洗洗 維豐維全 時樂聖賢 自適陶然  
 都徳如泉 多福獨專

癸丑元旦

庭前堆雪兆豊映 齋裡風鑪煖病軀  
 諒闇迎年無賀客 獨謳舜徳酌屠蘇

そのおもかげ終

### 附 録

#### 一、略 歴

慶應元年九月九日

新潟縣南蒲原郡加茂町大字加茂ニ出生

初メ菊太郎ト稱シ後先考ノ名ヲ襲キ保則ト改ム

明治三十二年十二月二十三日

内閣統計局事務ヲ囑託ス

内 閣

同 三十七年一月十九日

衛生ニ關スル統計事務取扱ヲ囑託ス

内 務 省

同 四十年四月

東京勸業博覽會審査補助ヲ囑託ス

東 京 府

同四十二年十一月十七日

脚氣病ニ關スル統計事務ヲ囑託ス

臨時脚氣病調査會

任内閣統計局技師

同四十三年六月九日

叙高等官六等

内 閣

七級俸下賜

明治四十三年七月廿日

叙正七位

同四十四年六月廿二日

第五回地方改良講習會講師ヲ囑託ス

内務省

同 七月一日

特種救濟事業調査ヲ囑託ス

同

同 八月十六日

六級俸下賜

内閣

任内閣統計官

大正二年六月十三日

叙高等官六等

内閣

四級俸下賜

同 六月三十日

統計事務囑託ヲ解ク

臨時脚氣病調査會

大正三年一月十三日

陞叙高等官五等

内閣

三級俸下賜

同 二月二十日

叙從六位

同 五月六日

東京大正博覽會審査官ヲ囑託ス

農商務省

同

審査第十四部勤務

東京大正博覽會事務局

大正四年十二月十六日

二級俸下賜

内閣

大正五年五月十七日

花柳病豫防治療ニ關スル講習會講師ヲ囑託ス

内務省

同 六月廿八日

保健衛生調査會委員被仰付

内閣

同 十月七日

内閣統計局原表課長兼審査課長ヲ命ズ

同

同六年一月二十四日

本會事務ヲ囑託ス

恩賜財團濟生會

任臨時國勢調査局統計官

叙高等官四等

同七年五月十四日

二級俸下賜

内閣

兼任内閣統計官

叙高等官四等

同五月十五日

臨時國勢調査局調査課長ヲ命ズ

内閣

同 五月二十日

叙正六位

宮内省

同 九月二十一日

一級俸下賜

内閣

そのおもかけ

九年四月二十三日

叙勳六等授瑞寶章

同

四

同 五月十九日

兼任國勢院統計官

内閣

叙高等官四等

第一部國勢院審査課長ヲ命ズ

内閣

國勢調査員ヲ命ズ

内閣

三級俸下賜

同 十月二十一日

陸叙高等官三等

十年一月二十六日

二級俸下賜

同

叙從五位

同

依願免本官兼官

同 一月二十七日

國勢院ノ事務ヲ囑託ス

同

叙正五位 特旨ヲ以テ位一級被進

同 二月十日

宮内省

十年三月十六日

本市市務ニ關スル事務ヲ囑託ス

東京市役所

同 四月十日

社會事業科教授ヲ囑託候也

東洋大學

同 四月十五日

本大學講師ニ囑任ス

早稻田大學

同 六月十四日

第十五回地方改良講習會講師ヲ囑託ス

内務省

同 六月八日

遞信官吏練習所統計學教授ヲ囑託ス

遞信省

同 七月六日

國勢院第三回統計講習會講師ヲ囑託ス

國勢院

同 七月十四日

保健衛生調査委員被仰付

内閣

同 十月八日

東京市吏員講習所講師ヲ囑託ス

東京市役所

同 十一月十四日

東京帝國大學農學部講師ヲ囑託ス

東京帝國大學

同 十二月十九日

第一回國勢調査ノ事ニ膺リ盡力尠カラズ依テ勳五等瑞

寶章ヲ授ケ賜フ

賞勳局總裁

十一年四月十二日

大倉高等商業講師囑託

同 四月十五日

日本女子大學校講師囑託

附 錄

五

そのおもかけ

十二年一月二十二日

統計局ノ事務ヲ囑託ス

内 六

同 四月十八日

慶應義塾大學醫學部統計學授業囑託

閣

同 四月二十一日

立教大學講師囑託

十三年十月二十九日

農學部講師囑託ヲ解ク

同

帝國大學講師ヲ囑託ス 法學部、農學部、經濟學部、統計學授業擔任ノコト

十四年八月四日

東京市外代々幡町大字代々木ノ自邸ニ逝去

## 一、著書、論文

醫學博士北里柴三郎、二階堂菊太郎

一、醫育問題に對する調査の概要

宮入慶之助、二階堂菊太郎

一、死亡原因類別調査報告書

明治三十六年九月  
内閣統計局臨時刊行

一、印刷局疾患調査ノ梗概

明治三十六年十月  
内閣統計局臨時刊行

一、死亡原因第二類別調査報告

明治三十九年三月  
内閣統計局臨時刊行

一、第三十三統計年鑑各科略解

統計集誌(自第四百四號  
至第四百十號)

一、分量的に觀察したる脚氣

明治三十九年十月  
内閣統計局臨時刊行

一、公務及自由業就中教育に關する有業者の死に就て

明治四十三年四月、  
國家醫學會雜誌第二七六號

一、本邦人の月別死亡の研究

統計集誌 自大正四年十月  
至同 五年二月

一、本邦小兒死亡の特徴

統計集誌 自同 三年十月  
至同 四年六月

一、本邦人の生死に關する統計的批判の概要

統計集誌 大正四年七月

一、歐洲諸國の出生死亡の趨勢を論評して本邦の事態に及ぶ

保險評論 大正五年一月

一、本土と臺灣との死亡原因比較

臺灣統計協會雜誌(第九十三號)

一、日本の女の妊孕力

衛生世界 大正四年一月

一、本邦人口動態の概況

一、人口問題より觀たる日本の膨脹

新日本 第六卷第十號

一、第一回花柳病講習會講習錄

花柳病ノ統計

大正六年三月三十日一成社發行

一、大正六年東京市第一回統計講習會講演集

人口動態統計及衛生統計

大正六年十一月三十日東京市役所

一、大正七年東京市第二回統計講習會講演集

國勢調査及人口統計

大正七年十二月五日東京市役所

一、大正八年東京市第三回統計講習會講演集

國勢調査

大正九年三月三十一日東京市役所

一、統計大意 國勢調査 講義錄 北海道廳刊行

大正九年六月廿五日北海道廳刊行

一、國勢調査總覽

大正九年八月五日第一回國勢調査委員會

一、國勢院統計講習會講演錄(國勢院第一部編)

統計の實際

大正十一年三月十一日帝國地方行政會發行

一、衛生統計論

發行年月不詳  
(菊判二三四頁)

一、統計學綱要

(菊判四三二頁)

大正十四年十二月刊  
久野書店發行

大正十五年四月二十日印刷  
大正十五年四月廿五日發行

非賣品

東京市外代々木中田谷一三二  
編輯兼 二階堂つる  
發行人

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
印刷人 鷺見九市

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
印刷所 株式會社 秀英舍

終

